

輸血療法委員会

委員長 砥谷 和人

活動内容

輸血療法委員会は、高知県合同輸血療法委員会と連携を保ちながら、「適正輸血の推進」を実践する事を目標とし、病院長、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、事務、外部委員（高知県赤十字血液センター）などの輸血に関わる多部門のメンバーで構成され、隔月に開催しています。本年度は5月に輸血同意書の改定を行いました。また定例会とは別に、11月には当委員会が主体となり、5年毎のI&A認定更新の外部視察を受け、適正な輸血療法が行われていることの認定の更新をすることができました。I&Aとは、inspection（点検）とaccreditation（認証）の略号で、日本輸血・細胞治療学会による輸血機能評価認定制度であり、病院機能評価の項目にも挙げられています。I&A視察時には輸血委員長（私）と輸血部の森主任の誘導のもと、愛媛県赤十字血液センター長の羽藤高明氏を含む3名の視察団により、ER、手術室、ICU、6A病棟等関係する部門の視察が行われました。各部門の担当の方にはご対応いただきましてありがとうございました。（当院は高知県内で最初のI&A認定施設として2015年からI&A認定を受けています。）以上のようにI&A視察において、当院の輸血療法は適正安全に行われていることが確認できましたが、改善点も指摘されています。その中で最も重要なのが血液型検査の2回実施についてです。輸血療法の副作用で最も重大な転帰となるのが不適合輸血であることは周知の事と思います。（患者間違い、血液型間違いが無いよう、現場では細心の注意を払っていただいているはずですが。）この点、当院では主に検査技師や病棟・外来看護師による輸血製剤の投与前後のチェックは十二分にできているのですが、最も根幹となる血液型検査の2回実施がまだ不十分と思われます。この点は血液型の2回オーダーなど、医師の関与する部分であり、医師の意識改革を含めて改善が必要と思われます。なお、I&A視察で指摘された輸血マニュアルの中の、輸血副作用対応マニュアルについては改訂作業を完了しています。

2024年の各輸血用血液製剤・アルブミン使用量、タイプ&スクリーニング件数、自己血輸血、副作用報告を以下に示します。輸血製剤の使用量は経年的に増加傾向でしたが、本年は過去最高の使用量であった昨年よりは減少していました。廃棄率はここ数年低い値で維持できていますが、近年献血量の減少が続いており、引き続き適正な輸血療法の実施と、廃棄量の削減にご協力をお願いします。本年は重症アレルギー症例が2例発生し、いずれも回復していますが、引き続き輸血後の状態観察等に注意をお願いします。B型肝炎のウィンドウ期が疑われる献血者からの輸血例がありましたが、可能性は低いとして遡及調査には至っておりません。このように頻度は低いですが重篤な副作用も起こり得ることを、輸血前同意書で確認しつつ、引き続き、安全で適正な輸血療法の遂行にご協力お願いいたします。

輸血用血液製剤 使用量・廃棄率（2015～2024 年の推移）

2024 年の輸血用血液製剤使用量は、2023 年と比較し 10%減少しています。

2024 年の廃棄率は 0.3%となっています。

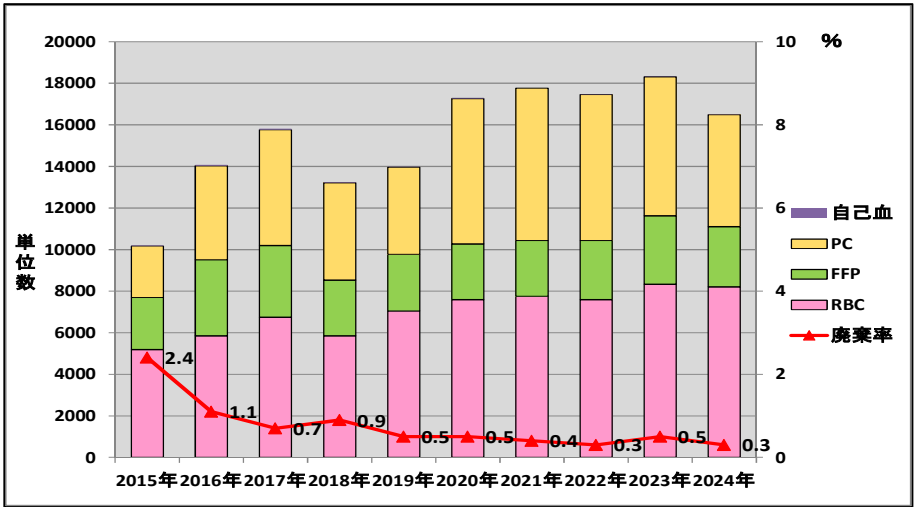


図 1

輸血用血液製剤 科別使用量

RBC（赤血球液）は、循環器内科の使用量が 1548 単位と最多で、消化器内科が 1384 単位、救急科が 1198 単位でした。FFP（新鮮凍結血漿）の使用量は心臓血管外科の 822 単位、PC（濃厚血小板）の使用量は血液内科の 2330 単位が最多でした。

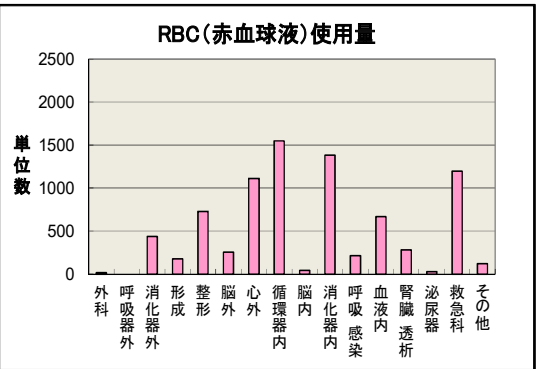


図 2

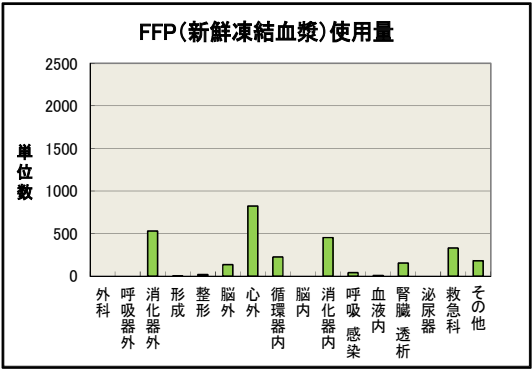


図 3

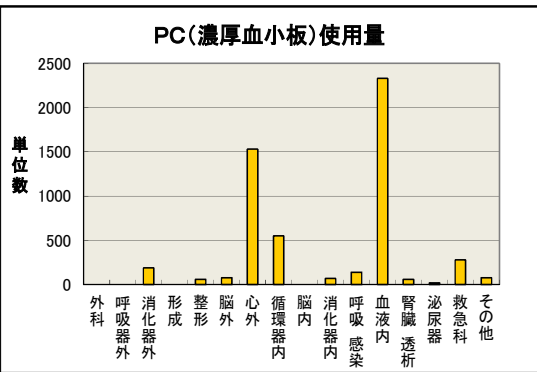


図 4

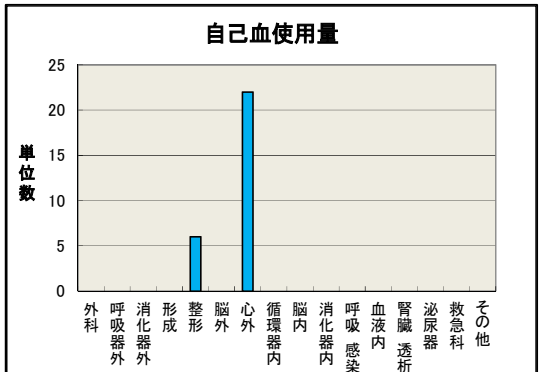


図 5

アルブミン製剤 使用量

2024 年の総使用量は昨年に比べて減少しています。

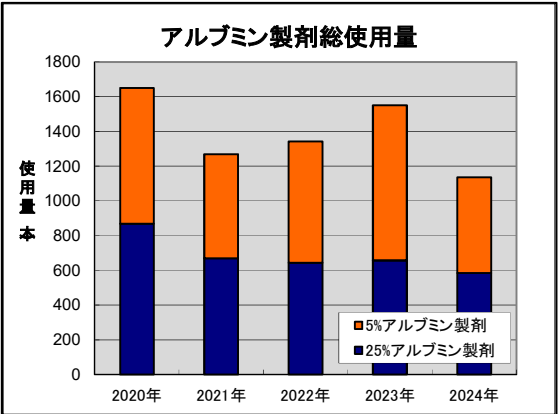


図 6

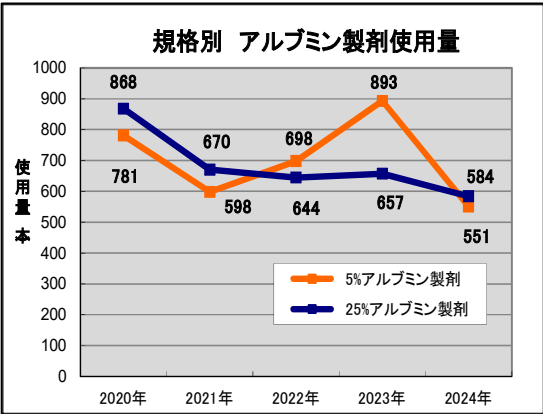


図 7

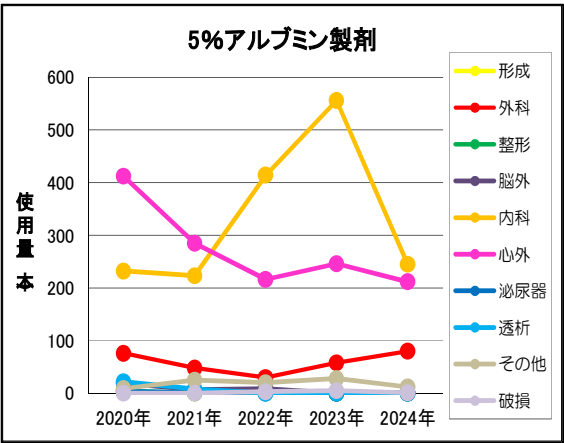


図 8

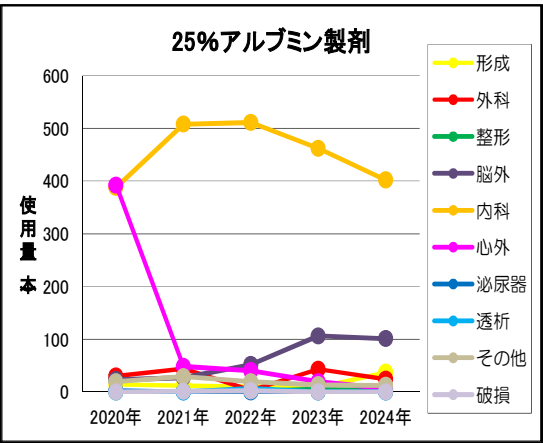


図 9

タイプ&スクリーン（T&S）件数

2024 年の依頼件数は 1474 件、実施率は 13%でした。診療科別の依頼件数では、整形外科が多く、次いで消化器外科、心臓血管外科と続いています。

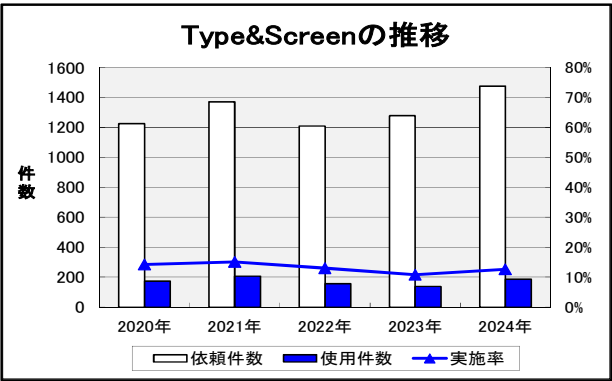


図 10

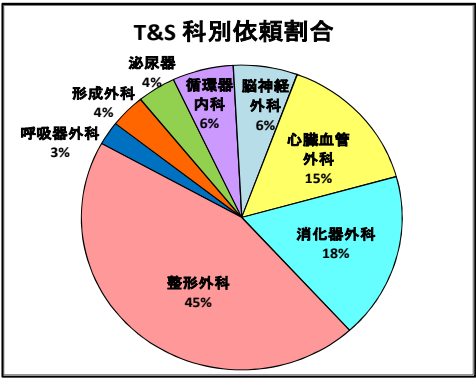


図 11

自己血件数

2024 年の心臓血管外科手術（開胸・開腹術）は合計 165 件、整形外科手術は 105 件、合計 270 件に回収式自己血を施行しました。一方、貯血式自己血は 16 件でした。

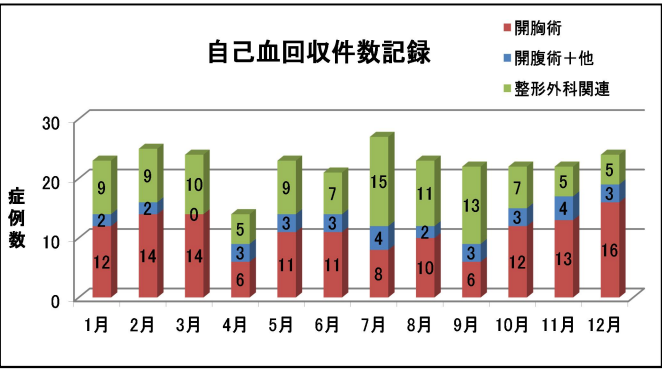


図 12

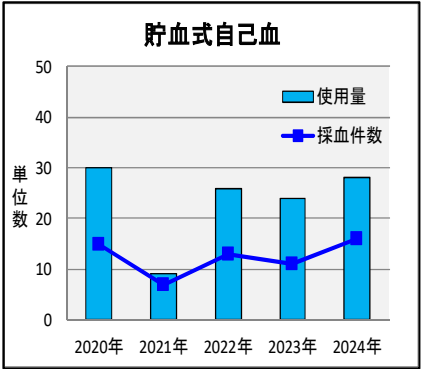


図 13

副作用報告

発生率は 1.5% で、重症アレルギーが 2 件発生しました。

表 1

	副作用			使用量	
	バック数	実人数	発生率	バック数	単位数
	83	39	1.5%	5494	16520
【製剤別】					
RBC	47	32	1.1%	4104	8204
FFP	24	7	2.9%	836	2898
PC	12	8	2.2%	538	5390
自己血	0	0	0.0%	16	28

表 2

副作用項目		副作用件数		
		RBC	FFP	PC
A.非溶血性副作用		57件	36件	14件
症状項目	①1℃以上の発熱	23	0	2
	②麻疹疹	8	10	3
	③悪寒	4	0	0
	④戦慄	1	0	0
	⑤冷汗	0	0	0
	⑥発疹	14	17	5
	⑦掻痒感	0	8	2
	⑧悪心	1	0	0
	⑨嘔吐	0	0	0
	⑩胸痛	0	0	0
	⑪顔面紅潮	0	0	0
	⑫血圧低下	2	0	0
	⑬アナフィラキシー様反応	1	1	0
	⑭ショック	0	0	0
	⑮ヘモグロビン尿	0	0	0
	⑯その他	3	0	2
B.溶血性副作用		0件	0件	0件
急性溶血				
遅延性溶血				
C.輸血後感染症		0件	0件	0件
HBV				
HCV				
HIV				
その他				
合計(件)		57	36	14

注:件数は全てバック当たりとします。ただし、A)の症状項目のみは重複可とします。